

蒲田部木原遺跡9

— 蒲田部木原遺跡第11次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第977集

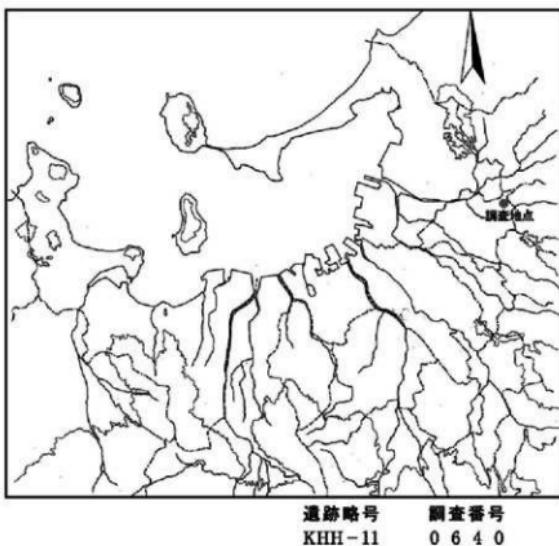
2008

福岡市教育委員会

蒲田部木原遺跡9

— 蒲田部木原遺跡第11次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第977集



2008

福岡市教育委員会

序

福岡市は玄界灘に面し、古代より大陸・半島との交流が絶え間なく行われてきました。そのため福岡市域には多くの遺跡が残されています。近年の著しい都市化による開発により失われるこれらの文化財を後世に伝えるのは、本市教育委員会にとっての重要な責務であります。

本書は、倉庫建設による水路付け替えに伴い実施した蒲田部木原遺跡第11次発掘調査について報告するものです。今回の調査では弥生時代前期末から古墳時代後期にかけての溝・土壙・壺棺墓・木棺墓、縄文晩期の土器などが発見されました。これらは糟屋地域の歴史を解明する上で重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の一資料として活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで多くのご協力を賜りました関係者の方々に対し、心から謝意を表します。

平成20年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例　　言

1. 本書は倉庫建設による水路付け替えに伴い、福岡市教育委員会が福岡市東区蒲田2丁目1111-1他において実施した蒲田部木原遺跡第11次発掘調査の報告書である。
2. 本書に掲載した遺構実測図は阿部泰之が作成した。
3. 本書に掲載した遺物実測図は阿部・平川敬治が作成した。
4. 本書に掲載した挿図の製図は阿部がおこなった。
5. 本書に掲載した写真は阿部が撮影した。
6. 本書で用いた方位はすべて磁北で、真北より約6°30' 西偏する。
7. 本書で掲載した埋蔵文化財包蔵地の範囲については平成6年3月現在の推定線であり、変更される可能性がある。現在の詳細については福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課に確認されたい。
8. 遺構の呼称は掘立柱建物をSB、溝をSD、土塁をSK、ピットをSP、炉跡をSR、甕棺墓をSTと略称する。遺構番号は重複を避けるため現場で付した通し番号を原則そのまま用いている。
9. 本書に関わる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。
10. 本書の執筆・編集は阿部が行った。
11. 本書で報告する発掘調査の細目は以下の通りである。

遺跡調査番号	0 6 4 0		遺跡略号	KHH-11	
地番	福岡市東区蒲田2-1111-1他		分布地図番号	No.002 蒲田	
開発面積	8,564m ²	調査対象面積	280m ²	調査面積	417.4m ²
調査期間	平成18年8月16日～9月26日				

本文目次

はじめに	1
第1章 位置と環境	2
第2章 調査の記録	3
第3章 まとめ	24

挿図目次

Fig. 1 蒲田郡木原遺跡と周辺の主な遺跡 (1/25,000)	2
Fig. 2 調査区位置図 (1/1,000) 3	
Fig. 3 調査区北壁土層断面実測図 (1/100) 4	
Fig. 4 SA140実測図 (1/60) 4	
Fig. 5 調査区全体図 (1/300) 折り込み	
Fig. 6 SD01・02・03・04実測図 (1/60) 5	
Fig. 7 SD45・70・82・124・139実測図 (1/60)	6
Fig. 8 SD02出土遺物実測図 (1/4) 7	
Fig. 9 SD03出土遺物実測図 (1/4) 7	
Fig. 10 SD45・82・124出土遺物実測図 (1/4) 7	
Fig. 11 SD139出土遺物実測図 (1/4) 8	
Fig. 12 SK18実測図 (1/60) 9	
Fig. 13 SK37実測図 (1/60) 9	
Fig. 14 SK18出土弥生土器壺実測図 (1/4) 9	
Fig. 15 SK18出土弥生土器壺実測図 (1/4・1/6)	10
Fig. 16 SK20・36・51・74・28実測図 (1/60)	11
Fig. 17 SK37・51・74出土土器実測図 (1/4)	12
Fig. 18 SK28出土土器実測図 (1/4) 12	
Fig. 19 SK120出土土器実測図 (1/4・1/6) 13	
Fig. 20 SR113実測図 (1/40) 14	
Fig. 21 SR113出土焼土塊実測図 (1/4) 14	
Fig. 22 木棺墓・ST35・100実測図 (1/40) 15	
Fig. 23 木棺墓出土土器及び壺棺実測図① (1/4・1/10)	16
Fig. 24 壺棺墓（小見棺）実測図 (1/40) 17	
Fig. 25 壺棺実測図② (1/10) 18	
Fig. 26 壺棺実測図③ (1/10) 19	
Fig. 27 ピット出土土器実測図 (1/4) 20	
Fig. 28 遺物包含層出土縄文土器実測図 (1/4)	21
Fig. 29 石器及び石製品実測図 (1/4・1/2) 22	
Fig. 30 造構候出面出土土器実測図 (1/4) 23	

図 版 目 次

PL. 1 - 1	1区全景（南より）	PL. 9 - 1	SK28抜張後状況（南より）
PL. 1 - 2	2区全景（西より）	PL. 9 - 2	SK20（南より）
PL. 1 - 3	3区全景（西より）	PL. 9 - 3	SK51（南より）
PL. 2 - 1	3区包含層掘り下げ後全景（東より）	PL. 10 - 1	SK120（北より）
PL. 2 - 2	3区抜張区（東より）	PL. 10 - 2	炉跡SR113検出状況（北より）
PL. 2 - 3	4区全景（西より）	PL. 10 - 3	木棺墓SK101（東より）
PL. 3 - 1	4区包含層掘り下げ後全景（西より）	PL. 11 - 1	ST24・25（南より）
PL. 3 - 2	4区抜張後全景（南より）	PL. 11 - 2	ST26・27（南より）
PL. 3 - 3	5区全景（東より）	PL. 11 - 3	ST29（東より）
PL. 4 - 1	6区全景（西より）	PL. 12 - 1	ST32（東より）
PL. 4 - 2	7区全景（南より）	PL. 12 - 2	ST34（南より）
PL. 4 - 3	5区北壁土層（南より）	PL. 12 - 3	ST35（東より）
PL. 5 - 1	SD01（西より）	PL. 13 - 1	ST48（東より）
PL. 5 - 2	SD02（東より）	PL. 13 - 2	ST100（北より）
PL. 5 - 3	SD02土層（東より）	PL. 13 - 3	ST148（南より）
PL. 6 - 1	SD03（東より）	PL. 14 - 1	ST149（南より）
PL. 6 - 2	SD04（東より）	PL. 14 - 2	ST150（北より）
PL. 6 - 3	SD82（東より）	PL. 14 - 3	ST151（北より）
PL. 7 - 1	SD82上層（南より）	PL. 15	壺棺①
PL. 7 - 2	SK18（南より）	PL. 16	壺棺②
PL. 7 - 3	SK18上層（西より）		
PL. 8 - 1	SK37（西より）		
PL. 8 - 2	SK74・36（東より）		
PL. 8 - 3	SK28抜張前状況（東より）		

はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市教育委員会埋蔵文化財課（現・埋蔵文化財第1課）は、駿和運輸株式会社から東区蒲田2丁目1111地内における自社大規模流通施設建設工事に伴う埋蔵文化財事前審査願の提出を2006(平成18)年2月27日付で受けた。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である蒲田部木原遺跡に含まれていることから、2006(平成18)年3月から同年4月にかけ2回にわたる確認調査を実施した。その結果、削平を受けているとみられるものの高密度で遺構・遺物の存在が確認できた。この成果を元に両者で協議を行ったところ、倉庫部分は盛り土にて遺跡を保護できるが切り替えが必要な既存水路部分は遺構の破壊を免れないため、水路切り替え予定地について本調査を実施することで合意した。その後委託契約を締結し、同年8月16日から発掘調査を開始し、翌平成19年度に資料整理・調査報告書作成を行なった。

なお、調査全期間を通じて駿和運輸株式会社ならびに株式会社松本組の関係各位には様々な便宜を賜り、調査は大きな事故等もなく概ね順調に完了しました。紙上ではありますがここに記して深く感謝申し上げます。

2. 調査組織

調査委託：駿和運輸株式会社

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（現・埋蔵文化財第2課）

調査総括：埋蔵文化財課（現・埋蔵文化財第2課）課長 山口謙治（前任） 力武卓治（現任）

同課調査第1係長 池崎謙二（前任） 杉山富雄（現任）

調査庶務：文化財整備課（現・文化財管理課） 後藤泰子（前任） 井上幸江（現任）

事前審査：埋蔵文化財課（現・埋蔵文化財第1課）

事前審査係長 濱石哲也（前任） 吉留秀敏（現任）

同係主任文化財主事 吉留秀敏（前任） 宮井善朗（現任）

同係文化財主事 本田浩二郎（前任） 上角智希（現任）

調査担当：埋蔵文化財課調査第2係（現・埋蔵文化財第2課調査第1係） 阿部泰之

調査作業：辻節子 水井ゆり子 三谷朗子 徳永洋二郎 木田ひろ子 梅野真澄 松本順子 西川

吾郎 神原堅 脇山千代美 田原忠昭 阿比留忠義 菅野武 尾崎泰正 岩永いさ子

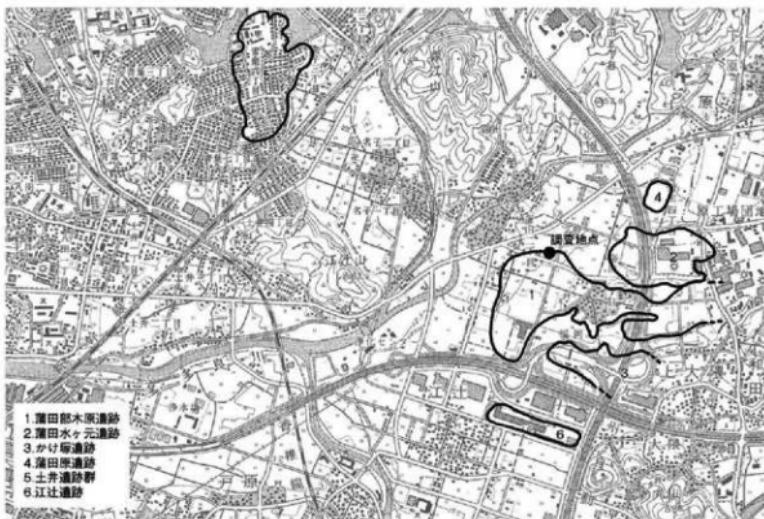
栗木昭孝

整理作業：窪田慧 黒早苗 白須正枝

第1章 位置と環境

現在の行政区で福岡市東区・糟屋郡粕屋町・同久山町にまたがる粕屋平野は、おもに多々良川とその支流によって形成された沖積平野である。蒲田部木原遺跡群はこの平野、久原川によって形成された冲積平野部に位置する。中位段丘下位面が残丘として残っており、部本の集落がここに位置する。現在、調査地周辺は九州縦貫道福岡インターチェンジを擁し大規模流通団地としての様相を急速に呈しつつあるが、沖積平野部を俯瞰する低丘陵上に集落を営む農村の景観がおそらく近世以来、大きく変化せず続いてきたものと推測される。周辺には弥生早期の集落・古代の官衙建物群などが検出された江辻遺跡など著名な遺跡も多い。

蒲田部木原遺跡群の調査は1975年、九州縦貫道福岡インターチェンジ建設に伴う調査を嚆矢として現在に至るまで粕屋町教委を含めて調査を実施してきた。中位段丘である丘陵部分には部本古墳群が位置する。周塚・周堤を有する前方後方墳である1号墳を始め9基の古墳が確認されている。集落は丘陵端部及び沖積平野部に広がっているが、明瞭な遺構が検出されるのは弥生時代前期からである。当該期の遺構は少なく、本格的な集落が形成されるのは弥生中期前半頃とみられる。集落の縁辺部には甕棺墓群が形成される。部本古墳群が形成された古墳時代前期には遺構は減少するが、第3次調査において滑石を用いた玉作工房とみられる住居址が検出されている。古墳時代後期にはふたたび遺構が増加し、古代には第3次調査区で掘立柱建物群が検出されている。中世の遺構は13世紀台を中心に行第6次調査地で検出され、区画と屋敷墓を有する屋敷地の可能性が指摘されている。



(遺跡の範囲は平成6年3月時点での推定線です。現在は変更されている可能性があります。)

Fig.1 蒲田部木原遺跡と周辺の主な遺跡 (1/25,000)

第2章 調査の記録

1. 調査概要

調査地点は莆田部木原遺跡の北部に位置する。周辺は流通団地として整備が進んでおり大規模な倉庫が多く立ち並んでいるが、旧状は水田地帯である。調査区の南東約200mに部木の集落がある低丘陵が位置し、丘陵の西端に前方後方墳を有する部木古墳群がある。

狹長な調査区ではあったが、溝・甕棺墓・木棺墓など多くの遺構・遺物が検出された。調査区は工事施工業者と協議しつつ広げてゆくこととなつたため調査区が細切れ状態となり、南から順に1~7までの番号を付し逐次調査を実施した。

溝は埋土の堆積状況から水路と推測されるものが含まれる。近世以降のものもあるが、時期は弥生時代前期末～中期前半、古墳時代後期の2時期にわたる。土壙は大形のものが多く、弥生時代前期末の所産とみられる。甕棺墓は14基検出。幅12mほどの部分に集中している。うち成人棺は2基、汲出式の甕棺である。小児棺は上部を削られた形で検出される。型式としては須玖1式の範疇に収まる。



Fig.2 調査区位置図 (1/1,000)

15.40m

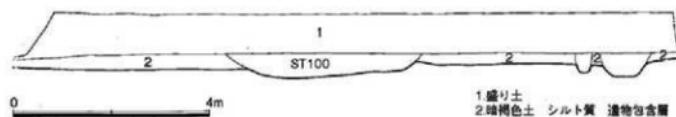


Fig. 3 調査区北壁土層断面実測図 (1/100)

木棺墓が1基検出された。底面に棺材の圧痕が検出されたため、木棺墓と判断した。棺の幅は55cm・長さは1.6m未満。木棺は組合式で、側板で小口板を挟み込むタイプである。

2. 造構と遺物

① 棚列 (SA)

SA140 (Fig. 4)

調査区東端、SD139の底面にて検出した。柱穴が2基連接するだけの造構だが、SD139のテラス部分に並ぶように位置するため暫定的に棚列として報告する。北側を調査する機会があれば性格がはっきりしよう。柱穴は長径60~70cmを測る不整円形を呈し、南側の柱穴は底面に柱圧痕状に円形の凹みを有する。埋土はSD139のそれに酷似する暗褐色土であり、切り合いは確認し得なかった。

遺物は弥生土器とみられる細片が出土したが、器種を特定しうるものではなく時期も不明である。

② 溝 (SD)

SD01 (Fig. 6)

調査区北端部にて検出した。近世以降の所産である可能性もあるがここでは暫定的に造構に含める。調査区を東西方向に直交して延びる溝で、幅30~40cm、深さ10cm前後を測る。断面形は逆台形で埋土は褐色シルトである。底面まで概ね変化なく堆積し流水の痕はない。

遺物は弥生土器とみられる細片が出土したが、器種を特定しうるものではなく時期も不明である。

SD02 (Fig. 6)

調査区北部にて検出した。概ね南北方向に延びる溝で幅7.6m・深さ50~60cmを測る。幅は上面を重機で削りすぎたため本来はさらに広がる。北壁にテラスを有し壁面の傾斜は緩やかである。土層断面をFig. 6に示す。埋土は2層に分かれ、上層はシルト質で滲水の状況が想定され、下層は砂礫で流

水があったことがわかる。水路としての機能が想定されよう。

出土遺物 (Fig. 8) 1~10は弥生土器である。1~5は壺である。何れも口縁部から胴部にかけての小片で、1は口唇部に刻みをもたない。4は胴部に断面三角形の突帯を有し疎な刻みが観察される。5は口径17.8cmに復元され、ハケ調整後の胴部に沈線を1条巡らす。6は壺である。胴部上部の小片で外面に有輪羽状文を有する。文様の凹部に顔料が残存し、丹塗りであったことがわかる。7・8は壺の底部である。いずれも底部のみ残存する破片で7は底径7.6cm・残存高6.7cm、8は外面を板状の工具でナデしており底径6.4cm・残存高7.7cmを測る。9はいわゆる亀の甲タイプの壺である。口縁部から胴部にかけての小片で器壁は磨滅し口径19.2cmに復元される。10は壺であ

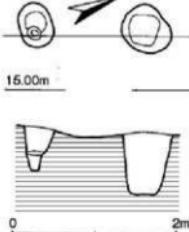


Fig. 4 SA140実測図 (1/60)

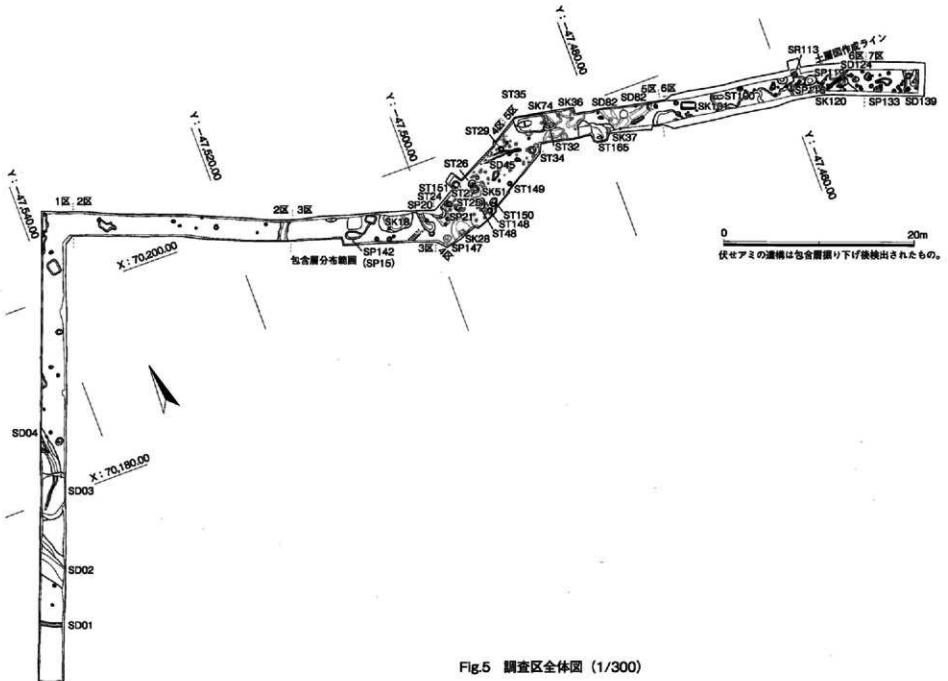


Fig.5 調査区全体図 (1/300)

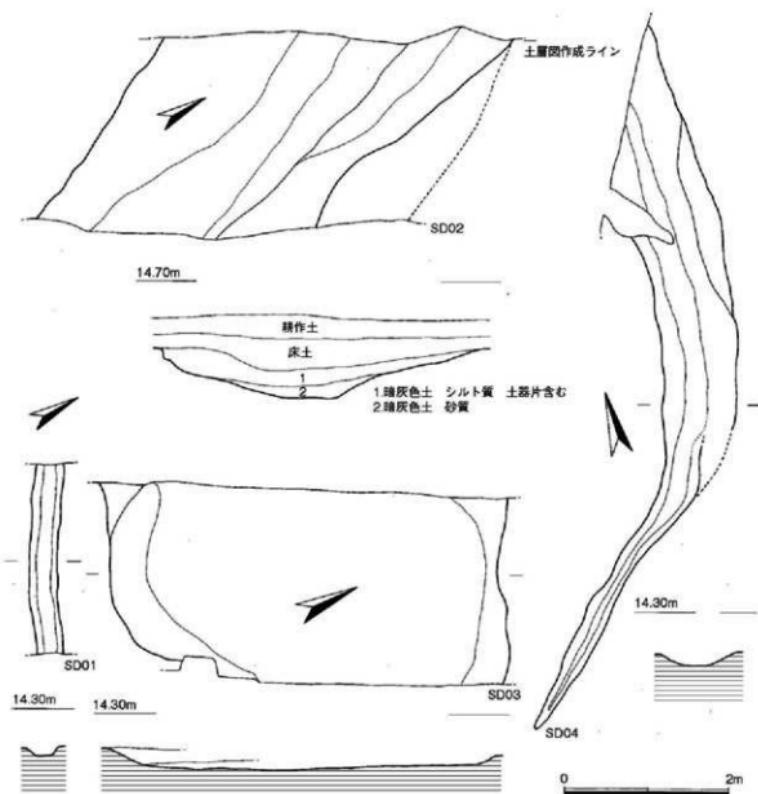


Fig.6 SD01・02・03・04実測図 (1/60)

る。底部の小片で底径11.6cmに復元される。内面は器壁の剥落が顕著である。11は投弾である。ラグビーボール形にユビオサエにて成形し、一部欠損するが器長4.7cm・径2.6cm・重量26.1gを測る。上記何れの遺物も胎土は精良で焼成は良好である。

SD03 (Fig. 6)

調査区北部、SD02の北で検出した。SD04を切り、概ね東西方向に延びる溝で幅3.9~5m、深さ15~23cmを測る。プランは一定せず浅い溝である。底面から湧水する。埋土は暗灰色シルト質土で底面までほぼ均一な堆積であった。流水の痕跡は確認できなかった。

出土遺物 (Fig. 9) すべて弥生土器である。1は壺である。口縁部の小片で口唇部に刻み目を有する。2は壺か。口縁部の小片で残存高5.8cmを測る。3は亀の甲タイプの壺である。口縁部から胴部にかけての小片で残存高7.1cmを測る。4は壺である。口縁部の小片で口唇部に刻み目を有する。5は壺である。底部のみ残存する破片で底径7.4cmを測り外面にはヘラ状の工具によるナデが観察される。

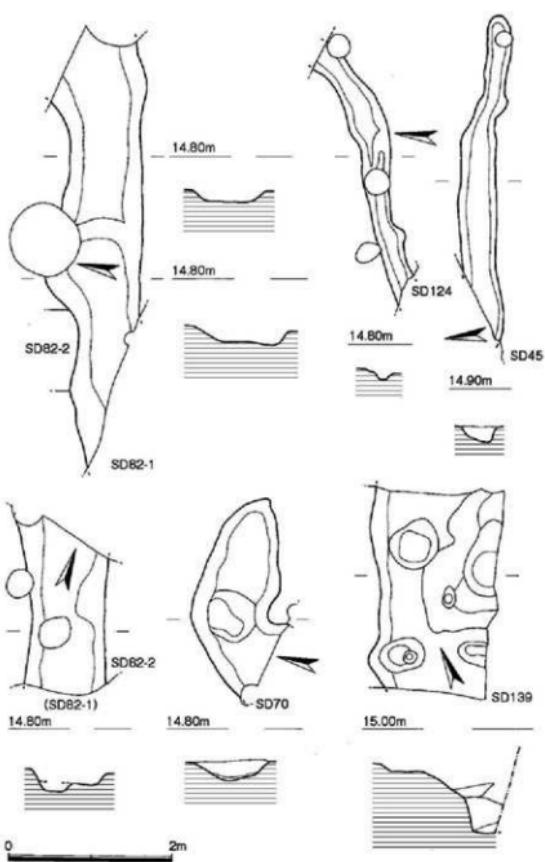


Fig.7 SD45・70・82・124・139実測図 (1/60)

で、延長約4mにわたって検出された。削平のためか東への延長は検出できなかったが、幅90~1m、深さ5~20cm前後と細く深い溝である。底面には溝と直交する形で凹凸が検出され、鏪状の工具で溝を掘削したと推測される。

出土遺物 (Fig. 10) 1は須恵器である。壺胴部の小片で、今回の調査で造構から出土した唯一の須恵器である。外面に擬格子叩き、内面に當て具痕を有する。2は土師器である。ミニチュアの鉢の小片で口径7.2cmに復元される。3は弥生土器壺である。底部の小片で残存高6.0cmを測る。

上記何れの遺物も胎土は精良で焼成は良好である。

6は壺である。口縁部から頸部にかけての小片で口径16.8cmに復元される。頸部と胴部の境界に低い突起を1条巡らす。7は高壺または鉢。口縁部から胴部にかけての小片で口径19.4cmに復元される。8は壺または鉢。口縁部から頸部にかけての小片で口径25.2cmに復元される。口縁部下に沈線が1条巡る。

SD04 (Fig. 6)

調査区北部、SD03に切られる溝である。緩く張を描きSD03と直交し、北に延びる。幅90~1m、深さ15cm前後を測る。SD03に切られる部分は細くなり、貫通することなく途切れる。埋土はSD03に似た暗褐色シルトで、底面まではほぼ均一な堆積であった。流水の痕跡は確認できなかった。

遺物は弥生土器壺などの細片が出土した。

SD45 (Fig. 7)

調査区中央部、壺棺墓ST35の南西に位置する。ほぼ東西方向に延びる溝

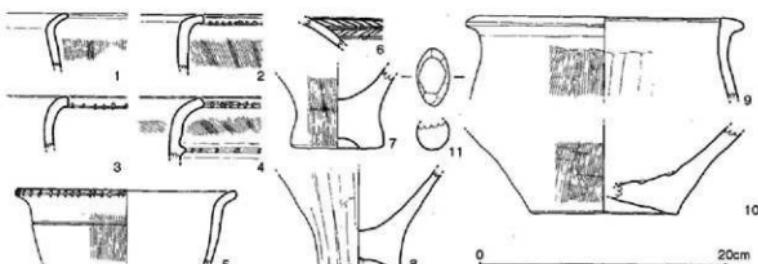


Fig.8 SD02出土遺物実測図 (1/4)

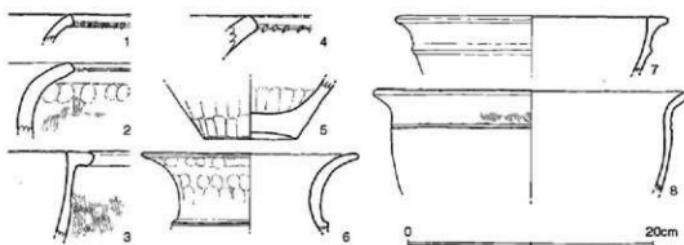


Fig.9 SD03出土遺物実測図 (1/4)

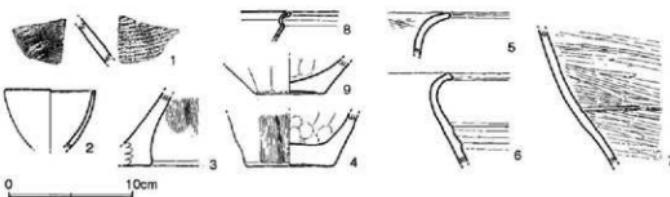


Fig.10 SD45・82・124出土遺物実測図 (1/4)

SD70 (Fig. 7)

調査区中央部、包含層掘り下げ後に検出した溝であるが本来包含層を切っているものとみられる。延長2.4mを検出した。L字状に屈曲し南に延びてゆく。幅85~97cm・深さ11~24cmを測る。埋土は暗褐色土で底面までほぼ均一な自然堆積である。

遺物は壺などの弥生土器が少量出土した。

SD82 (Fig. 7)

調査区東部にて検出した。包含層掘り下げ後に検出した溝であるが本来包含層を切っているものとみられる。調査区を東西方向に斜めに貫流し延長5.1mを検出した。直交する溝を切っており、当初一連の溝として掘り下げた。幅80cm~1.15m・深さ16~20cmを測る。断面は低いカマボコ形を呈し、埋土は暗褐色土の自然堆積で流水の痕跡はない。なお直交する溝は人為的に埋めているとみられ、南

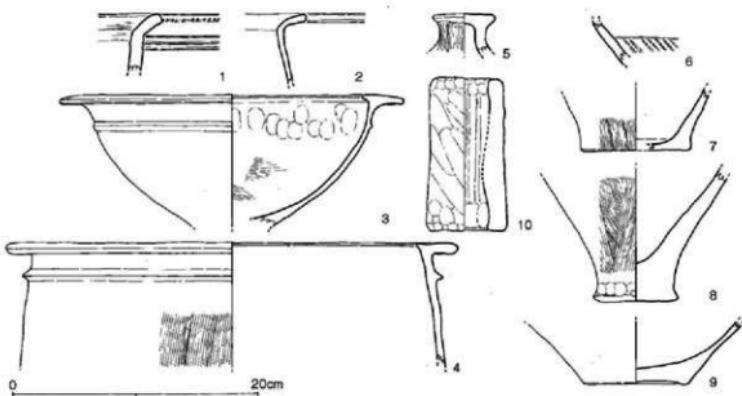


Fig. 11 SD139出土遺物実測図 (1/4)

北方向の溝を東西方向に掘り直している可能性がある。

出土遺物 (Fig. 10) 何れも弥生土器。4は壺である。底部のみ残存する破片で底径3.8cmを測る。5も壺である。口縁部の小片で残存高3.5cmを測る。6・7は壺である。6は口縁部から胴部にかけての小片で頸部に突帯を2条有する。7は頸部から胴部にかけての小片で、胴部との境界に沈線を1条有する。中途で途切れ左端が始点、右端が終点とみられる。

SD124 (Fig. 7)

調査区東部で検出した。概ね東西方向に延びる溝で調査区を斜めに貫流する。幅25~46cm・深さ5cm前後と細く浅い。流水の痕跡はみられなかった。

出土遺物 (Fig. 10) 8は绳文土器である。黒川系の浅鉢で口縁部の小片である。9は弥生土器壺である。底部のみ残存する破片で底径5.4cmを測る。外面は板状の工具でナデられる。

SD139 (Fig. 7)

調査区東南部にて検出した南北方向に延びる溝である。土壤となる可能性もあるがここでは暫定的に溝として報告する。東壁は調査区外となって検出できなかった。幅1.6m以上・深さ75cmを測る。西壁にテラスを有しピットが2基検出された。埋土は暗褐色土で底面までほぼ均一な堆積である。流水の痕跡はみられなかった。

出土遺物 (Fig. 11) 1~9は弥生土器。1は鉢か。口縁部の小片で口縁下に沈線を3条有する。残存高4.7cmを測る。2は壺である。口縁部の小片で残存高5.7cmを測る。3は高杯の杯部とみられる。杯部の小片で口径21.2cmに復元される。口縁下に突帯を1条有する。4は壺である。口縁部から胴部にかけての小片で口径30.2cmに復元される。口縁下に突帯を1条巡らす。5は蓋である。頂部のみ残存し径5.1cm・残存高3.3cmを測る。6は壺である。胴部の小片で外面に羽状文を有する。残存高3.4cmを測る。7・8は壺である。7は底部のみ残存する破片で底径9.0cmを測る。8は底部から胴部にかけて残存する小片で、底径7.0cmに復元される。外面に一部スヌ状の付着物がみられる。9は壺である。底部のみ残存する破片で底径8.3cmを測る。内面は器壁が剥落する。10は支脚である。約60%残存し上部径4.4cm・底部径4.5cmに復元され、器高12.4cmを測る。

③土壤 (SK)

8基検出した。この中には土壇墓も含まれる可能性があるが埋葬遺構については現場でそれと推測し得た遺構だけ本項とは別に記述している。

SK18 (Fig. 12)

調査区中央部、調査区がクラシク状に北に折れる直前の所で検出した。遺物包含層を切って構築される。北部は調査区外となつて検出できなかった。長径3.8m・短径2m以上、深さ45cmを測る大形の土壤である。平面形は不整な椭円形を呈し、中央が略円形に深くなる。埋土は3層に分かれ、下部を人為的に埋めた後自然に埋没したとわかる。

出土遺物 (Fig. 14・15) 他の遺構に比し土器が豊富に出土し、特にFig. 15掲載の壺は弥生前期末のまとまった資料である。

(Fig. 14) すべて弥生土器壺である。1は胴部～肩部にかけての小片で胴部径29.6cmに復元される。頸部との境界に低い突帯を1条有する。2は頸部の小片。胴部との境界に沈線を1条有する。残存高8.8cmを測る。3は口縁部から頸部にかけての小片で口径16.4cmに復元される。口唇部に刻み目を有する。

(Fig. 15) 何れも弥生土器壺である。1は底部の小片で底径10.6cmに復元される。器壁削減して調整は不明瞭である。2は口縁部から胴部にかけて1/3程度残存する破片で、口径20.4cmに復元される。口唇部に刻み目を有しハケ調整後の胴部に

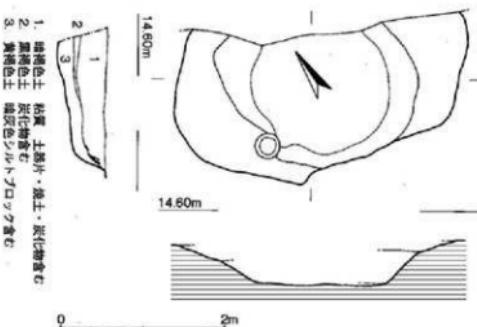


Fig.12 SK18実測図 (1/60)

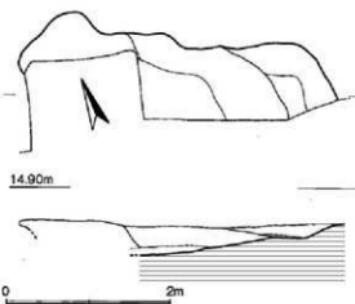


Fig.13 SK37実測図 (1/60)

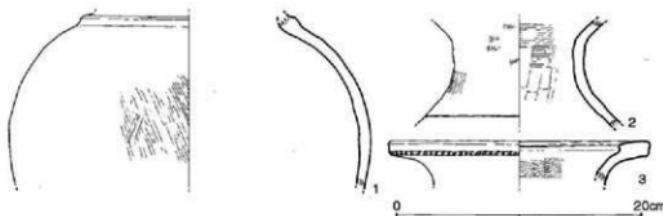


Fig.14 SK18出土弥生土器壺実測図 (1/4)

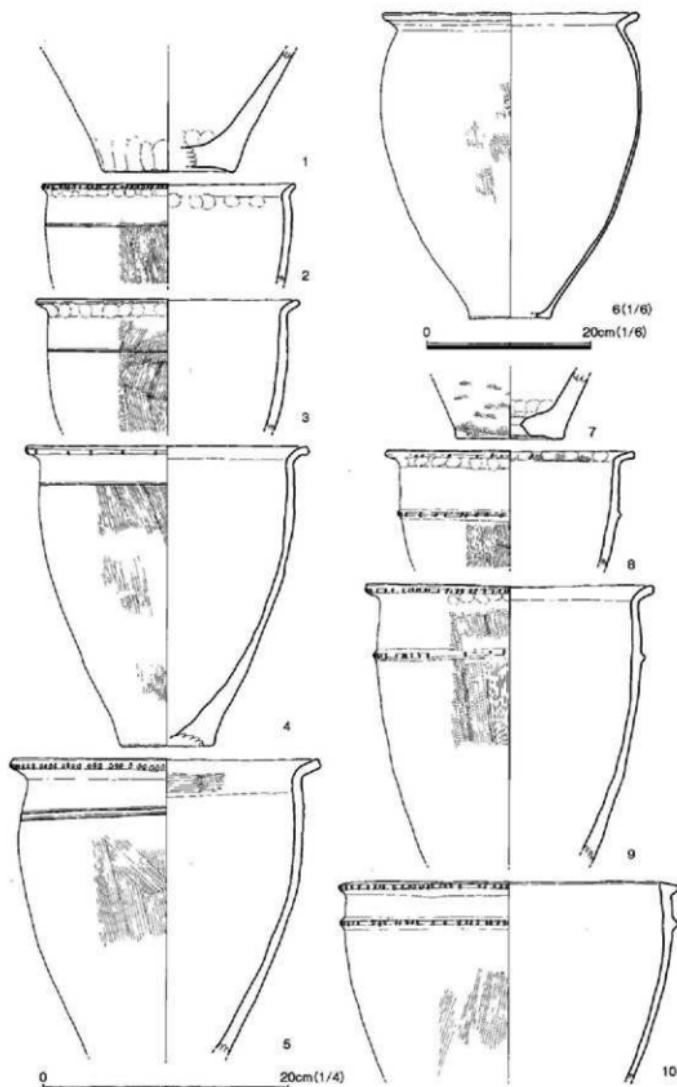


Fig.15 SK18出土弥生土器実測図 (1/4・1/6)

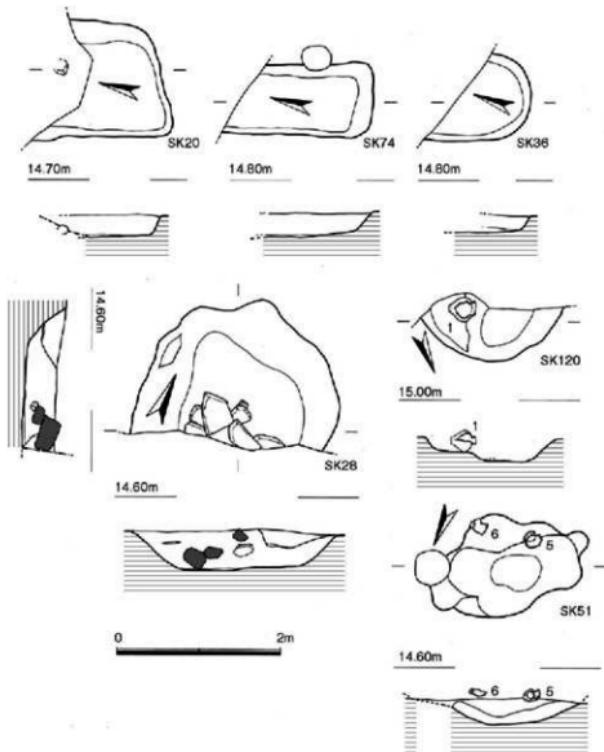


Fig.16 SK20・36・51・74・28実測図 (1/60)

1条沈線を有する。3は口縁部から胴部にかけての小片で、口径11.0cmに復元される。口唇部に刻みではなくハケ調整後の胴部に1条沈線を施す。4は約1/3個体程度残存する破片で、口径23.2cm・底径7.4cmに復元され、器高24.5cmを測る。口唇部に疎な刻みが観察されハケ調整後の胴部に1条沈線を施す。胴部外面の一部に炭化物が付着する。5は約1/3個体程度残存する底部を欠く破片で、口径25.5cm・残存高24.3cmを測る。胴部外面下半は器壁が剥落している。口唇部に密な刻みを有し胴部に2条沈線を施す。6は須玖1式の甕で他の土器とは時期が異なる。混入とみられるが現場では確認できなかった。約1/5個体残存する破片で、口径32.0cm・底径9.8cmに復元され、器高37.9cmを測る。薄造りで器壁は磨滅し調整は不明瞭である。7は底部の小片である。注目されるのは底部の孔で、内底面に焼成前に凹みを設け、焼成後内面から打撃し穿孔している。焼成後の穿孔を前提とした作りとみられる。底径8.4cmに復元される。8は口縁部から胴部にかけての小片で、口径20.2cmに復元される。口唇部にわずかに刻みを施し、胴部に低い突帯を1条巡らし刻み目を施す。9は約1/3個体程度残存する破片で、底部を欠損する。口径21.6cmに復元され、残存高22.8cmを測る。口唇部に

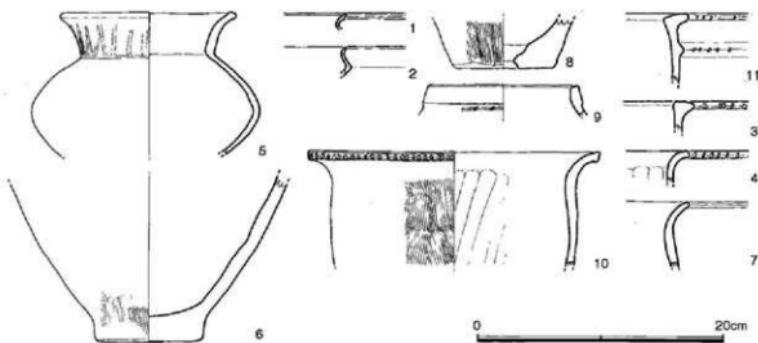


Fig.17 SK37・51・74出土土器実測図 (1/4)

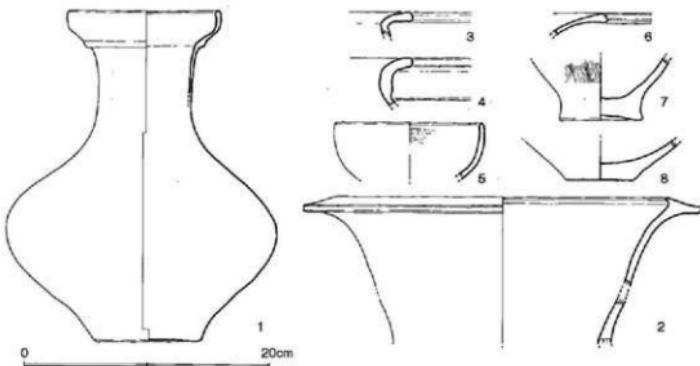


Fig.18 SK28出土土器実測図 (1/4)

密な刻みがあり、胸部に低い突帯を1条巡らし疎な刻み目を施す。胸部下半は器壁が剥落し、実際の使用に供された土器と推測される。10はいわゆる亀の甲タイプの壺である。底部を欠き、口縁部の1/3程度が残存する破片である。口径27.8cmに復元され、口唇部は粘土帶を貼り付けることで作り出し、密な刻みを施す。その下2cmに低い突帯を1条巡らし、これも刻みを施す。下部の外面は器壁が剥落し、実際の使用に供された土器と推測される。

上記何れの土器も胎土は精良で焼成は良好である。

SK37 (Fig. 13)

調査区中央部にて検出した。南半分が調査区外となり全容は不明だが概ね長軸を東西方向にもつ不整規円形の土壙となろうか。SD82を切る。西側を搅乱に切られるが、長径3.15m以上・短径1.65m以上。深さ32cmを測る。底面は東にテラスを有し階段状となる。埋土は東部が暗褐色土、西部が黒褐色土で漸移的に変化する。全体に径3cm程度の焼土塊を含んでいた。人為的に埋めた土ではなく自然堆積とみられる。

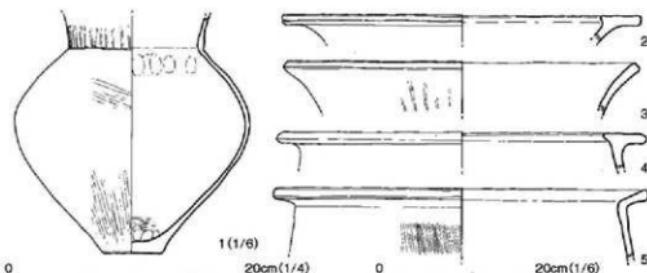


Fig. 19 SK120出土土器実測図 (1/4・1/6)

出土遺物 (Fig. 17) 1・2は縄文土器である。黒川式系統の浅鉢で、口縁部の小片である。何れも器壁は磨滅し調整は不明。3・4は弥生土器である。何れも刻みを有する甕口縁部の小片で、3はいわゆる亀の甲タイプ。4は板付II式の甕である。

SK20 (Fig. 16)

調査区中央部にて検出した。北部は調査区外となるが、不整な台形を呈する土壌となろうか。東西1.4m・南北1.8m以上・深さ30cmを測る。埋土は暗灰褐色土で概ねフラットな底面までほぼ均一な堆積である。

遺物は、弥生土器小片が出土した。

SK28 (Fig. 16)

調査区中央部にて検出した。包含層を切る遺構だが包含層の上面では検出できなかった。南部が調査区外に延びる不整円形の土壌である。東西4.8m・南北1.92m以上・深さ48cmを測る。底面はほぼフラットだが北壁に2箇所テラスを有する。中央部から長径最大1m程度の角礫が複数出土した。組まれた状態ではなく埋没途中で投げ込まれた状況であった。埋土は暗褐色土で底面までほぼ均一な堆積である。

出土遺物 (Fig. 18) すべて弥生土器。1・2は甕である。1はほぼ完形だが口縁部の欠けが目立つ。薄作りで丹塗り痕が観察される。器高27.0cm・底径8.6cmを測り、口径13.5cmに復元される。2は口縁部の小片。大型の個体で口径40.4cmに復元される。3は甕である。口縁部の小片で残存高2.0cmを測る。4は甕である。口縁部から頸部にかけての小片。5は小形の鉢である。底部を欠く小片で口径11.8cmに復元される。6は広口甕である。薄作りで丹塗り痕が観察される。7は甕である。底部の小片で底径6.6cmに復元される。8は甕である。底部のみ残存する破片で底径5.4cmを測る。これらの遺物から、SK28の時期は弥生時代中期前半頃と推測される。

SK36 (Fig. 16)

調査区中央部にて検出した。土壌墓の可能性を有するが現場では積極的な根拠を見いだせなかつた。SK74と長軸をほぼ平行にして並んでいる。北部が調査区外となるが長径1.38m以上・短径1.2mを測る楕円形の土壌である。底面はほぼフラットだが西方に傾斜している。断面形は箱形で壁面はほぼ垂直に立つ。埋土は黒褐色土で堆積は東から流入したように見えるレンズ状である。

遺物は弥生土器とみられる小片が少量出土した。

SK51 (Fig. 16)

調査区中央部にて検出した。包含層を切る遺構だが包含層の上面では検出できなかった。後述の甕

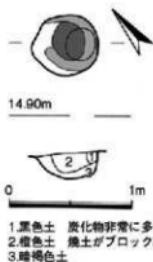


Fig.20 SR113実測図 (1/40)

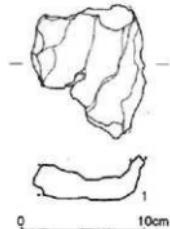


Fig.21 SR113出土焼土塊実測図 (1/4)

棺墓ST26・27に切られる。西端をピットに切られるが長径1.9m以上・短径107cmを測る不整橢円形の土壙である。深さ24cmを測るが本来さらに深くなると推測される。埋土は暗褐色土で底面まではほぼ均一な堆積である。

出土遺物 (Fig. 17) いずれも弥生土器。5は短頸壺である。下部を欠損し1/3個体程度残存する破片で、口径19.5cmを測る。頸部外面に波状の暗文を有する。6・7は壺である。6は底部から胴部にかけての小片で底径8.8cmを測る。7は口縁部から胴部にかけての小片で残存高5.3cmを測る。これらの遺物から、SK51の時期は弥生時代前期末頃か。

SK74 (Fig. 16)

調査区中央部にて検出した。土壙墓の可能性を有するが現場では積極的な根拠を見いだせなかつた。SK36と長軸をほぼ平行にして並んでいる。北部が調査区外となるが長径1.65m以上・短径87cmを測る隅丸方形の土壙である。底面はほぼフラットで断面形は隅丸逆台形である。壁面は西壁がほぼ垂直、東壁はやや傾斜が緩い。埋土は暗褐色土で堆積は凹みに流入した様なレンズ状である。木棺等の痕跡は検出されなかつた。

出土遺物 (Fig. 17) 何れも弥生土器である。8は壺である。底部の小片で底面に孔が観察される。焼成後外底面から打撃し穿孔したとみられる。9は無頸壺である。口縁部の小片で口径12.0cmに復元される。10・11は壺である。いずれも口縁部から胴部にかけての小片で10は口径23.6cmに復元される。11は口縁部下に1条突帯を有し疎な刻みを施す。

SK120 (Fig. 16)

調査区東部にて検出した。東端をSD124に切られる。南部が調査区外となるが長径1.6m以上・短径65cm以上を測る楕円形の土壙とみられる。底面はほぼフラットで東部にテラスを有し、壺形土器が1点底面に接し、横倒しの状態で出土した。この出土状況からSK120は土壙墓の可能性を有するが、現場では積極的な根拠を見いだせなかつた。土壙の断面形は逆台形である。

出土遺物 (Fig. 19) 何れも弥生土器である。1～3は壺である。1は遺構図に図示した壺で口縁部を失う。意図的に打ち欠かれた可能性もあるが表面観察では断言できない。全体の約2/3残存する個体である。底径7.0cm・残存高29.6cm・胴部径29.3cmを測る。器壁は磨滅するが、頸部には縦方向の暗文が残る。2・3は口縁部の小片で2は広口壺。口径22.8cmに復元される。3は口唇部に丹塗り痕が観察される。直口壺で口径29.2cmに復元される。4・5は壺である。何れも口縁部から胴部にかけての小片で、4は口径23.6cmに復元され、残存高3.6cmを測る。5は残存高5.8cmを測り、口径30.0cmに復元される。これらの遺物から、SK120の時期は弥生時代中期前半頃と推測される。

④炉跡 (SR)

SR113 (Fig. 20)

調査区東部にて検出した。調査区北壁との境界で検出したため調査区を拡張し全体を把握した。長径55cmを測るやや不整な円形を呈し西側がやや突出する。深さは20cmを測り底面は概ねフラットである。壁面は東面が垂直に近く立ちあがり、西壁は緩く上端につながる。土層断面からは最下層の暗褐色土を入れた後1・2層が堆積した状況を示し、人為的である。最下層の第3層および地山には被熱した部分は観察されず、炉というよりはむしろ焼土ピットというべきかもしれない。

出土遺物 (Fig. 21) 1は焼土塊である。全体に橙色に被熱し断面形は碗形を呈する。形状からは炉底の小片と推測される。SR113からは土器などの遺物は出土せず、詳しい時期はわからない。

⑤木棺墓 (SK)

SK101 (Fig. 22)

調査区東部、壺棺墓ST100の西にて検出した。長軸を東西方向にもつ長方形プランを呈する。長径1.33m、東辺55cm、西辺78cmと西小口がやや長く、正確には台形に近い形状である。深さは18~20cmを測り、本来はさらに深くなるとみられる。底面はほぼフラットだが、木棺の痕跡とみられる圧痕を検出した。棺材に圧迫されたか底面の地山がわずかに盛り上がり、側板が小口板を挟み込む組合式の木棺だったと推測される。墓墳の壁面はほぼ垂直に立ち上がり、木

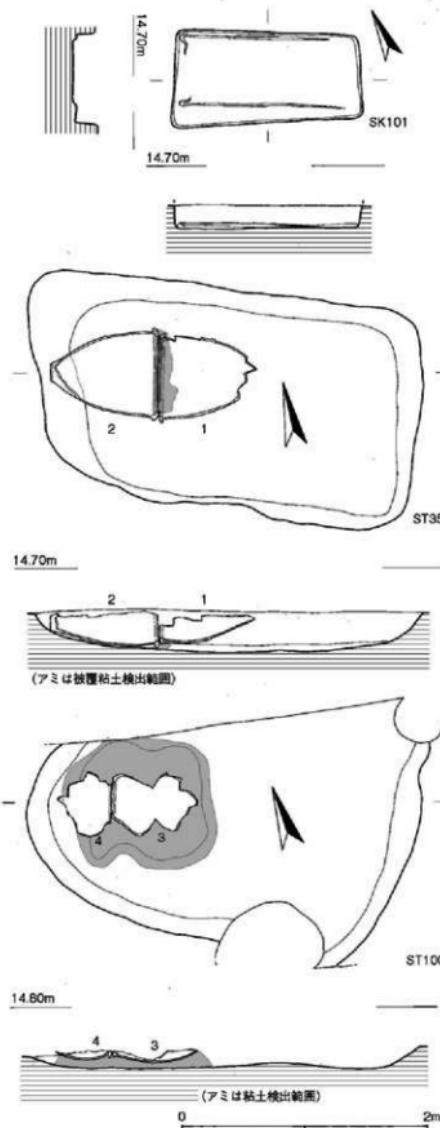


Fig.22 木棺墓・ST35・100実測図 (1/40)

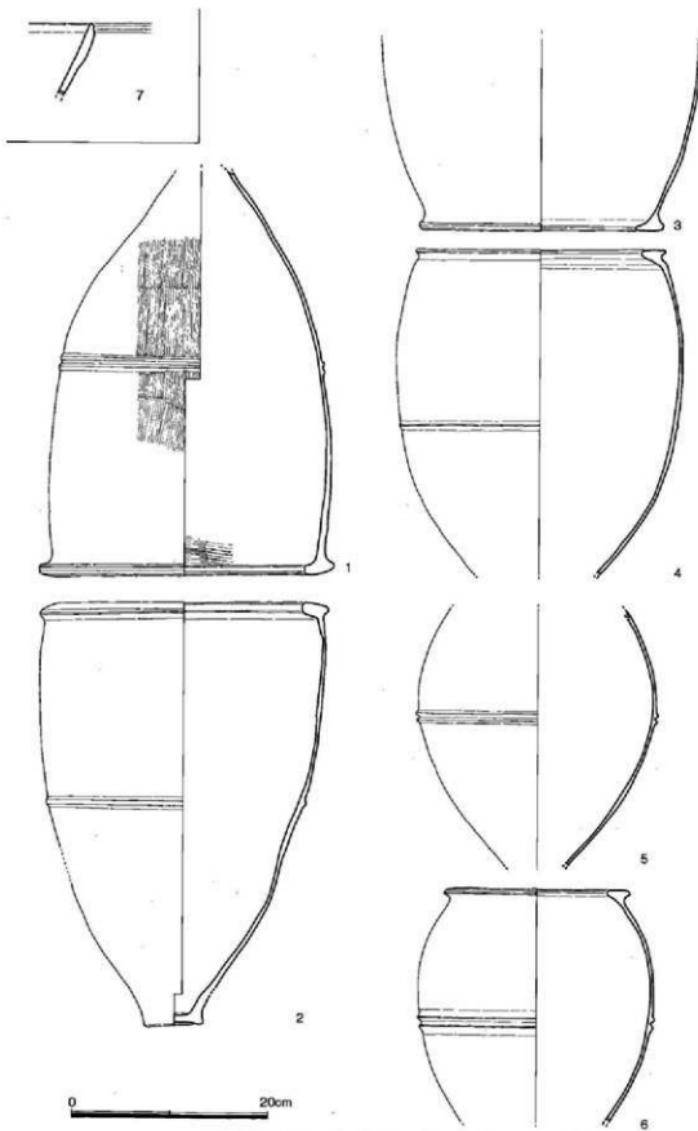


Fig.23 木棺墓出土土器及び壺棺実測図① (1/4・1/10)

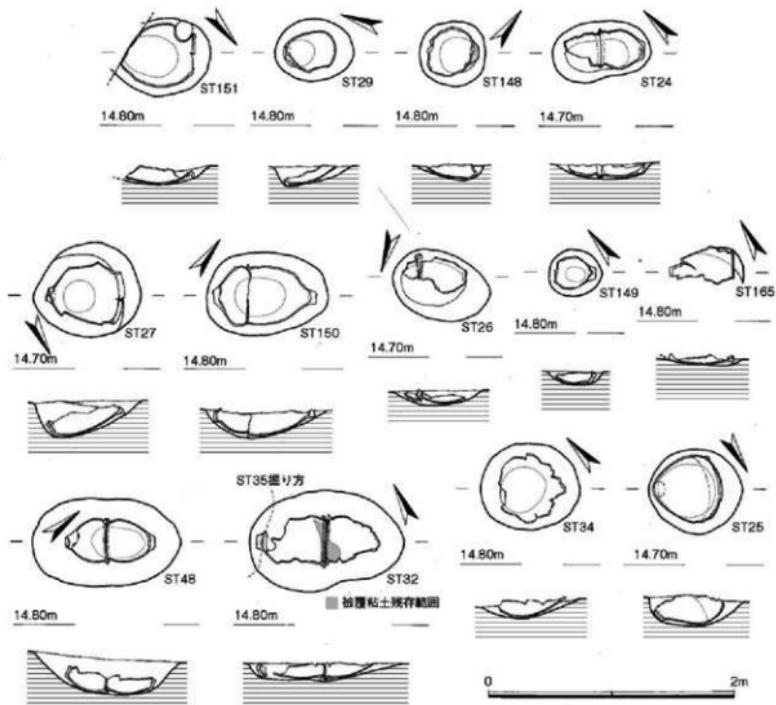


Fig.24 壺棺墓（小児棺）実測図（1/40）

棺を取める以外余分なスペースは作られていない。埋土は暗褐色土で底面までほぼ均一な堆積である。出土遺物（Fig. 23）7は縄文土器である。粗製の深鉢で、口縁部の小片である。混入とみられる。

⑥壺棺墓（ST）

15基検出した。すべての壺棺墓は造物包含層を切る。成人棺は2基で、残りはいわゆる小児棺である。以下、成人棺から小児棺へと記述を進める。

ST35 (Fig. 22)

調査区中央部で検出した。墓壇は長軸を東西方向にもつ不整な方形を呈し、長径3.2m・短径1.85m、深さ34cmを測る。削平の結果残りは悪いが壺棺は早くに崩壊したためか破片は少なくない。壺棺は壺と壺の複棺で接口式の配置である。接合部の底面に黄白色の被覆粘土が残存していた。さらに上壺の下部に盛り土し上壺を安定させている。棺内から遺物は出土しなかった。

壺棺（Fig. 23）1が上壺、2が下壺である。1・2とも約70%残存し1は口径51.0cm・残存高82.2cmを測る。底部を欠く。胴部中ほどに断面M字形の突帯を1条巡らす。外面・口縁部内面にハケ調整が観察される。2は口径48.0cm・器高86.7cmを測り上壺が若干径が大きい。胴部中ほどに断面台形の

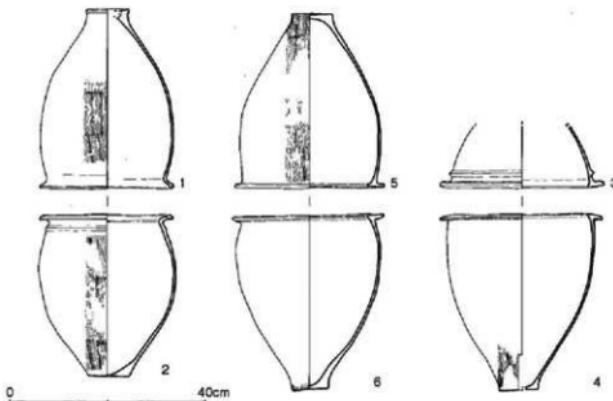


Fig.25 壺棺実測図② (1/10)

突帯を1条巡らす。器壁は磨滅し調整は不明。いずれも汲田式の壺棺である。

ST100 (Fig. 22)

調査区東部で検出した。墓壙は2箇所をピットに切られ、北部が調査区外となるが長軸を東西方向にもつ不整な楕円形を呈するとみられ、長径3.23m・短径1.7m以上、深さ18cmを測る。削平の結果残りは悪く、壺棺も下部がわずかに残存するのみであった。壺棺は壺と壺の複棺で接口式の配置である。壺棺を埋置する部分に盛り土を施し、棺を安定させている。盛り土は2層に分かれ、下部は暗褐色、上部は黄褐色のシルト質土であった。接合部の被覆粘土は検出されず、棺内から遺物は出土しなかった。

壺棺 (Fig. 23) 3が上壺、4が下壺である。3は約20%残存し口径38.2cmに復元され、残存高39.1cmを測る。底部を欠く。器壁は磨滅し調整は不明。4は口径41.0cmに復元されるが小片のため確実ではない。残存高66.5cmを測る。胴部中ほどに断面三角形の突帯を1条巡らす。器壁は磨滅し調整は不明。

以下の壺棺は小児棺である。

ST24 (Fig. 24)

調査区中央部にて検出した。壺棺エリアの最西端に位置する。墓壙は楕円形を呈し長径80cm・短径45cmを測る。削平の結果残りは悪く深さは10cmを測る。壺棺は壺と壺の複棺で接口式の配置である。接合部の被覆粘土は検出されず、棺内から遺物は出土しなかった。

壺棺 (Fig. 25) 1が上壺、2が下壺である。1は約1/2個体残存し口径26.6cm・底径8.4cmに復元され、器高36.5cmを測る。口縁部はくの字形を呈し口唇部をつまみ上げる。2は約90%残存する個体で口径26.3cm・器高33.1cm・底径8.2cmを測る。口縁部下に断面三角形の低い突帯を巡らす。

ST25 (Fig. 24)

調査区中央部、ST24の南で検出した。墓壙は不整な円形を呈し長径77cmを測る。削平の結果残りは悪く深さは25cmを測る。壺棺は壺の単棺である。底部と胴部を接地させ斜めに埋置する。棺内から遺物は出土しなかった。

壺棺 (Fig. 26) 1は壺形土器である。約40%残存する個体で底径10.8cm・残存高48.9cmを測る。胴

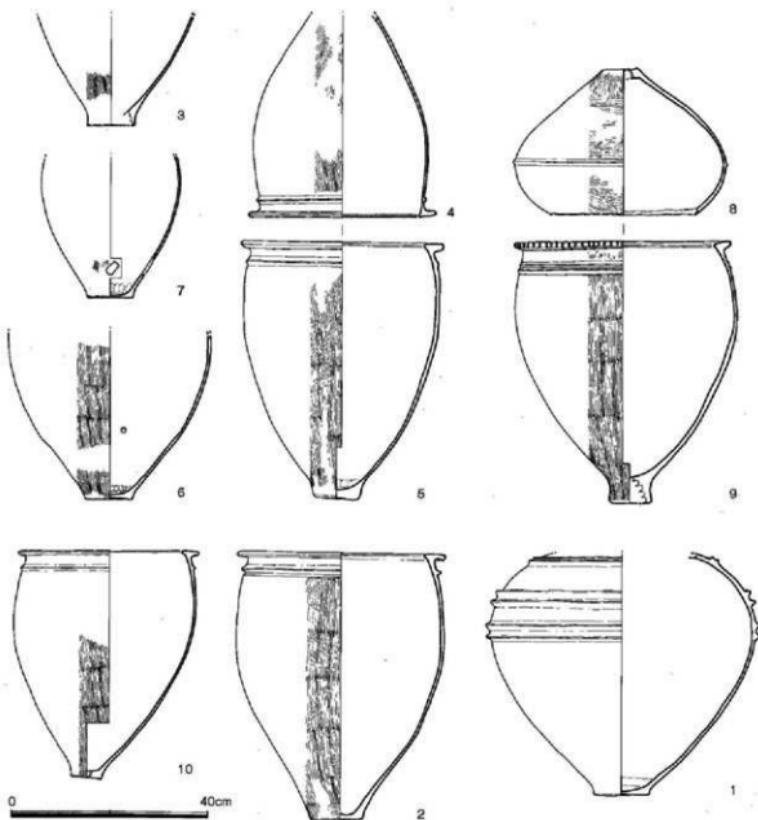


Fig.26 墓棺実測図③ (1/10)

部上部に断面M字形の突帯を3条巡らす。器壁は磨滅し調整は不明瞭である。

ST26 (Fig. 24)

調査区中央部で検出した。SK51を切る。墓壇は楕円形を呈し長径90cm・短径55cmを測る。削平の結果残りは悪く深さは13cmを測る。墓棺は複棺で接口式の配置である。接合部の被覆粘土は検出されず、棺内から遺物は出土しなかった。

覆棺 (Fig. 25) 3は上蓋・4は下蓋である。3は鉢形土器とみられる小片で口径26.8cmを測り、残存高12.6cmを測る。口縁部下に断面三角形の突帯を1条有する。器壁は磨滅し調整は不明瞭である。

4は蓋である。約40%残存する個体で全体に薄作りである。口径27.4cmに復元され、器高35.9cm・底径7.8cmを測る。器壁は磨滅するが外面底部付近にタテハケが観察される。

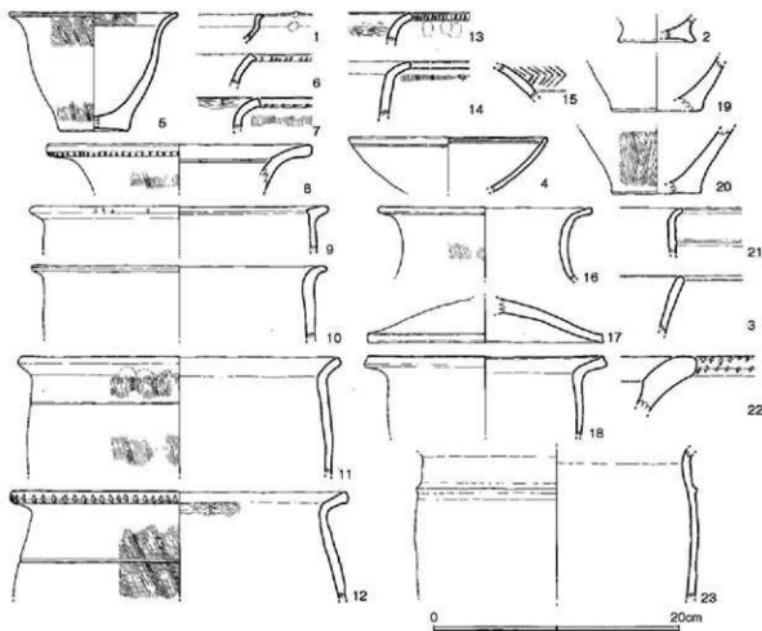


Fig.27 ピット出土土器実測図 (1/4)

ST27 (Fig. 24)

調査区中央部で検出した。SK51を切る。墓壙は不整な円形を呈し長径87cmを測る。削平の結果残りは悪く深さは28cmを測る。斎棺は壺の单棺とみられる。底部と口縁部を接地させ底部を下に斜めに埋置する。棺内から遺物は出土しなかった。

斎棺 (Fig. 26) 2は壺である。約70%残存する個体で口径34.0cmに復元され、器高55.0cm・底径10.8cmを測る。口縁下に断面三角形の突帯を1条巡らす。

ST29 (Fig. 24)

調査区中央部で検出した。調査区を北に拡張し全体を検出した。墓壙は梢円形を呈し長径65cmを測る。削平の結果残りは悪く深さは16cmを測る。斎棺は壺の单棺とみられる。底部を下に斜めに埋置する。棺内から遺物は出土しなかった。

斎棺 (Fig. 26) 3は壺である。胴部下半から底部にかけての小片で底径9.5cmに復元され、残存高22.3cmを測る。胴部外面にタテハケが観察される。

ST32 (Fig. 24)

調査区中央部にて検出した。SK74・ST35を切る。墓壙は梢円形を呈し長径102cm・短径80cmを測る。削平の結果残りは悪く深さは14cmを測る。斎棺は壺と壺の複棺で接口式の配置である。接合部には被覆粘土が検出された。棺内から遺物は出土しなかった。

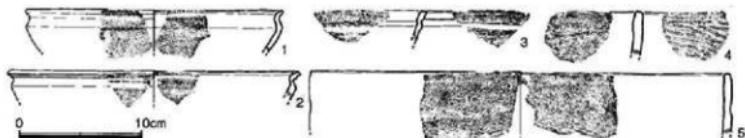


Fig. 28 遺物包含層出土縄文土器実測図 (1/4)

壺棺 (Fig. 26) 4が上壺、5が下壺である。4は約1/3個体残存し口径31.6cmに復元され、残存高41.1cmを測る。口縁部下に断面三角形の突帯を1条巡らす。5は約30%残存する個体で口径32.8cmに復元され、器高52.8cm・底径8.7cmを測る。口縁部下に断面三角形の低い突帯を巡らす。

ST34 (Fig. 24)

調査区中央部、ST35の南で検出した。墓壙は不整な円形を呈し長径82cmを測る。削平の結果残りは悪く深さは12cmを測る。壺棺は壺の单棺とみられる。胴部を接地させおそらく口縁部を打ち欠いた上で底部を上に斜めに埋置する。棺内から遺物は出土しなかった。

壺棺 (Fig. 23) 5は壺である。胴部のみ約30%残存する個体で径は不確実である。残存高52.7cmを測る。胴部中ほどに断面M字形の突帯を1条巡らす。

ST48 (Fig. 24)

調査区中央部、ST27の南で検出した。墓壙は楕円形を呈し長径121cm・短径72cmを測る。削平の結果残りは悪く深さは26cmを測る。壺棺は壺と壺の複棺で接口式の配置である。接合部に被覆粘土は検出されず、棺内から遺物は出土しなかった。

壺棺 (Fig. 25) 5が上壺、6が下壺である。5は約90%残存する個体で口径23.7cm・器高35.7cm・底径8.0cmを測る。全体に薄作りで外面にタテハケが観察される。6は約70%残存する個体で口径23.4cm・器高36.1cm・底径7.6cmを測る。外底面にユビナデの痕跡が観察される。

ST148 (Fig. 24)

調査区中央部、SK28の東で検出した。墓壙は不整な円形を呈し長径74cmを測る。削平の結果残りは悪く深さは15cmを測る。壺棺は壺の单棺とみられる。底部と胴部を接地させ底部を下に斜めに埋置する。棺内から遺物は出土しなかった。

壺棺 (Fig. 26) 6は壺である。上部を欠損し約30%残存する個体である。底径9.0cm・残存高34.3cmを測る。胴部内面に1箇所指頭大の圧痕が観察される。

ST149 (Fig. 24)

調査区中央部で検出した。墓壙は不整な円形を呈し長径45cmを測る。削平の結果残りは悪く深さは10cmを測る。壺棺は壺の单棺とみられる。底部と胴部を接地させ底部を下に斜めに埋置する。棺内から遺物は出土しなかった。

壺棺 (Fig. 26) 7は壺である。上部を欠損し約30%残存する個体である。全体に薄作りで底径9.2cm・残存高28.7cmを測る。胴部下半に1箇所孔が観察され、焼成後外面から打撃し穿孔したと推測される。

ST150 (Fig. 24)

調査区中央部、ST148の北で検出した。墓壙は楕円形を呈し長径1.0m・短径64cmを測る。削平の結果残りは悪く深さは20cmを測る。壺棺は鉢と壺の複棺で接口式の配置である。接合部に被覆粘土は検出されず、棺内から遺物は出土しなかった。

壺棺 (Fig. 26) 8が上壺、9が下壺である。8は壺形土器である。肩部から上部を打ち欠いており胴

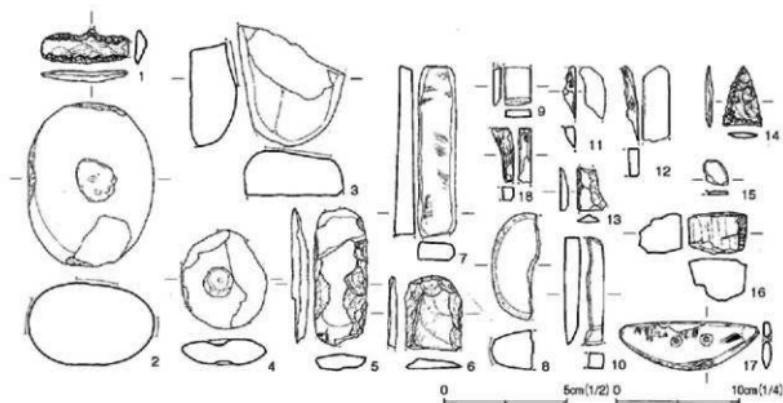


Fig.29 石器及び石製品実測図 (1/4・1/2)

部径42.7cm・底径7.4cmを測る。胸部中ほどに断面三角形の低い突帯を巡らし外面はヘラミガキである。9は壺である。約80%残存する個体で口径29.0cm・器高51.9cm・底径8.1cmを測る。口縁に刻みを有しその下に断面三角形の低い突帯を2条巡らす。

ST151 (Fig. 24)

調査区中央部で検出した。下部を重機で削ってしまった。墓壙は不整な円形を呈し長径80cm以上を測る。削平の結果残りは悪く深さは10cmを測る。壺棺は壺の単棺とみられる。主軸をほぼ水平に埋設する。棺内から遺物は出土しなかった。

壺棺 (Fig. 23) 6は壺である。底部を欠損し約20%残存する個体である。口径28.4cmに復元され、残存高47.7cmを測る。胸部中ほどに断面M字形の突帯を有する。

ST165 (Fig. 24)

調査区中央部で検出した。SK37を切る。大きく削平され墓壙は三日月状に残存するのみである。壺棺は壺の単棺とみられる。棺内から遺物は出土しなかった。

壺棺 (Fig. 26) 10は壺である。約1/5個体残存する破片である。口径29.6cm・底径6.4cmに復元され、器高46.6cmを測る。口縁下に断面三角形の突帯を1条有する。

⑦ピット出土の遺物 (Fig. 27)

1～4は绳文土器である。1は浅鉢の小片でSP119出土。2はSP15出土。深鉢の底部である。3は粗製深鉢の口縁部の小片でSP147出土。4は精製の浅鉢。SP133出土の小片である。何れも晩期黒川系の土器とみられる。

5以下は弥生土器である。5は小型の壺の小片。SP21出土。器高9.7cmを測る。6・7は壺である。口縁部の小片。6はSP119、7はSP15。8は広口壺。SP142出土で口縁部の小片である。9～12は壺である。何れも口縁部から腹部にかけての小片。9はいわゆる龟の甲タイプでSP119出土。10はSP119・11はSP142・12はSP20出土。13・14は壺である。口縁部の小片。13はSP114・14はSP20出土。15は壺である。SP36出土で肩部に無軸羽状文が観察される。16は壺である。SP142出土で口縁部から腹部にかけての小片。17は壺の小片でSP116出土。18～21は壺である。18は口縁部から腹部にかけて

の小片でSP116出土。19・20は底部の小片である。19はSP119・20はSP20出土。21はSP15出土で口縁部から肩部にかけての小片。22は壺である。SP20出土で口縁部の小片。23は甕である。SP142出土で肩部の小片。

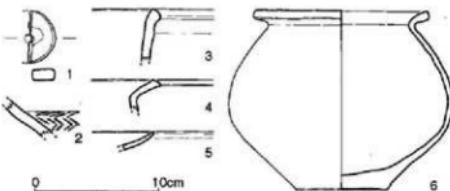


Fig. 30 遺構検出面出土土器実測図 (1/4)

⑥遺物包含層出土の遺物

(Fig. 28)

すべて縄文土器。上面での遺構検出が容易でなく、遺構の遺物が混入した。ここでは縄文土器に絞って図示する。1～3は浅鉢である。精製品とみられるが器壁磨滅し調整は不明。4・5は粗製深鉢である。いずれも口縁部の小片。何れも晩期黒川系の土器とみられる。

⑨石器及び石製品 (Fig. 29)

1はスクレイバーあるいは石匙である。灰色の安山岩質の石材を用い摘みを欠く。SD92出土。2は叩石である。両面および縁辺部に擦痕・打痕を有しほぼ完形でSK152出土。3は台石か。砂岩質の円錐で上部を欠損し下部は節理面で割れる。上面に擦痕を有する。ST100出土。4は青みがかった灰緑色の片岩系の石材を用いた叩石である。両面及び縁辺部に擦痕・打痕を有し欠損多くSD139出土。5・6は打製石斧である。いずれも結晶片岩を石材に用いる。5は刃部を欠損しSD124出土。6は下部を欠損しSD19出土。7は砥石である。灰白色の砂岩質の石材を用いる。下端を欠き2面を使用する。SP153出土。8は磨石である。灰白色の花崗岩質の石材を用いる。縁辺に擦痕を有しSP20出土で1/2個体残存する破片である。9は扁平片刃石斧である。頁岩または安山岩ホルンフェルスを石材に用いる。上部を欠損する刃部の破片でSD19出土。10は柱状片刃石斧である。頁岩質の石材を用いる。節理に沿って割れ、約1/2個体残存する。SK142出土。11は磨製石斧または砥石である。石斧とすれば基部の小片となろう。頁岩質の石材を用いる。SK142出土。12はSK28出土の砥石。灰白色の頁岩質の石材を用いる。図で上下の面を使用し節理で割れている。13はスクレイバーあるいは石匙である。安山岩質の石材を用いる。上下を欠損し残長3.5cmを測る。SD19出土。14は安山岩質の石材を用いた打製石鎌。ほぼ完形で無茎式の三角鎌である。器長2.5cmを測る。15は紡錘車か。片岩系の石材を用いた円盤状の石製品の小片である。16は試し打ち痕を有する黒曜石の原石である。17は石製懸滴具である。泥岩質の暗灰色の石材を用いる。ほぼ完形で2箇所の孔を両面から穿孔する。全面に研磨時の擦痕が残り、孔の上部に紐ずれが観察される。器長11.4cmを測る。全体に使いべりが顕著である。

⑩遺構検出面出土の遺物 (Fig. 30)

1は紡錘車である。1/2個体残存する破片で径4.3cmに復元される。2以下は弥生土器である。2は壺である。肩部に無軸羽状文が施される。3は甕か。口縁部から肩部にかけての小片である。4は甕である。口縁部の小片。5は白磁である。皿の口縁部の小片。釉は透明感ある暗灰緑色を呈する。6は無頸壺である。約2/3個体残存する破片で口径14.4cmに復元され、器高14.7cm・底径7.5cmを測る。

上記何れの土器も胎土は精良で焼成は良好である。

第3章 まとめ

今回の調査では、溝10条以上・土壙10基・木棺墓1基・甕棺墓15基・炉跡または焼土ピット1基を主な遺構として検出した。遺構の時期は弥生時代前期末・中期前半・古墳時代後期の4時期に分かれ、弥生後期以降の遺構は極端に少ない。甕棺墓群の検出は当初予想されなかつたものである。以下、調査を進めていく中で得られた所見を溝・土壙・木棺墓および甕棺墓を中心に簡単にまとめてみたい。

溝が10条以上検出されたことは既に述べた。ここではSD02・139に話を絞りたい。幅が広いSD02は人為的に掘削されているとみられ、砂礫の堆積が観察された。水路としての機能が予想され、SD02を南東に延長すると1本の水路にぶつかるが、おそらくこの水路は古い流路の痕跡で、ここから取水し下流すなむち北西方向の水田に導水していたものと想像している。遺物の時期は弥生前期末だが、その大半は上層のシルト質土から出土した。水路が機能を停止し水たまり状となった時期を示すもので、水路が機能していたのはもう少し古い時期とみられる。SD139は幅広い深い溝である。流水の痕跡はないが西縁に構列の可能性を有するピットを2基検出した。時期のわかる遺物の中では弥生中期前半が最も新しく、溝の埋没した時期を示している。この溝の西側にあたる今回の調査区からは竪穴住居・掘立柱建物は検出されず、SD139は集落の境界を示す区画溝のようにもみえる。

土壙は10基検出した。土壙墓の可能性を有するものもあるが、それ以外の土壙は概して大形である。SK18からは甕がまとまった量出土した。板付II式でも新しい時期の所産で、いわゆる亀の甲タイプの甕も含まれる。1点中期前半まで下る破片があるが混入とみられる。いずれも下部が劣化し上部のみ残存する破片も多いことから、これらは実際に煮炊きに使用されたもので、破損した後集落から持ち出されて廃棄されたものと推測している。弥生前期末の集落が近傍に存在する可能性が強いが、当該時期のまとまった集落は周辺では現在未検出で、今後の調査が期待される。

木棺墓は1基のみであった。墓壙は長辺約1.3mで成人の埋葬は困難とみられる。出土遺物が僅少で時期はわからないが、主軸の方向からおそらくほかの甕棺墓とそう極端に時期が離れることはないと推測される。

甕棺墓は15基検出した。すべての甕棺墓は遺物包含層を切る。成人棺は2基で、残りはいわゆる小児棺である。調査区中央部の幅34.5mのエリアに集中しており、おそらくこの幅で南北に甕棺墓群が広がっているものと推測される。小児棺墓底面は地山の黄褐色シルトに達しておらず、包含層が薄くなかったことを示している。複棺式の甕棺の埋置角は水平に近い。成人棺は口縁部の特徴ある断面形から汲田式、小児棺に用いられた土器は須玖I式の範疇に収まるものとみられ、時期は弥生中期前半に限定される。周辺では須玖式の成人棺が出土した調査地点もあり、時期によって埋葬エリアが異なる可能性もある。

以上、主な遺構について所見を述べてきたが、対照的な調査地として今回の調査地の北東約200mで実施された10次調査がある。この調査では弥生時代から古墳時代にかけての大規模な集落が検出されている。遺構密度も極めて高く、蒲田部木原遺跡の集落の中心とも思える。しかし今回の11次調査地では竪穴住居・掘立柱建物とも全く検出されず、水路・廃棄土壙・埋葬遺構が主に検出された。これらのことから今回の第11次調査地は集落の居住域に含まれない縁辺部であったと考えられる。既往の調査から弥生時代の集落はおそらく調査区の東にあるとみられ、弥生前期以前の遺構は希薄だがそう遠くない所に当該期の集落が眠っていると推測される。

図 版
P L A T E S



1. 1区全景（南より）



2. 2区全景（西より）



3. 3区全景（西より）

PL. 2



1. 3区包含層掘り下げ後全景（東より）



2. 3区拡張区（東より）



3. 4区全景（西より）



1. 4区包含層掘り下げ後全景（西より）



2. 4区拡張後全景（南より）



3. 5区全景（東より）

PL. 4



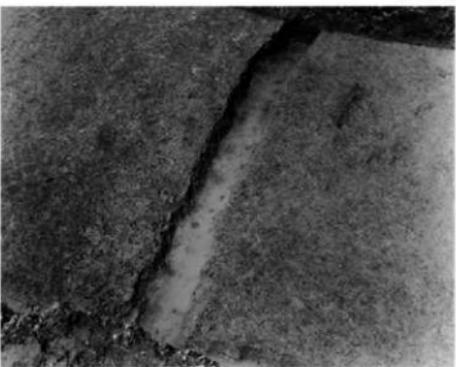
1. 6区全景（西より）



2. 7区全景（南より）



3. 5区北壁土層（南より）



1. SD01 (西より)



2. SD02 (東より)



3. SD02土層 (東より)

PL. 6



1. SD03 (東より)



2. SD04 (東より)



3. SD82 (東より)



1. SD82土層（南より）



2. SK18（南より）



3. SK18土層（西より）

PL. 8



1. SK37 (西より)



2. SK74・36 (東より)



3. SK28拡張前状況 (東より)



1. SK28拡張後状況（南より）



2. SK20（南より）



3. SK51（南より）

PL. 10



1. SK120 (北より)



2. 炉跡SR113検出状況 (北より)

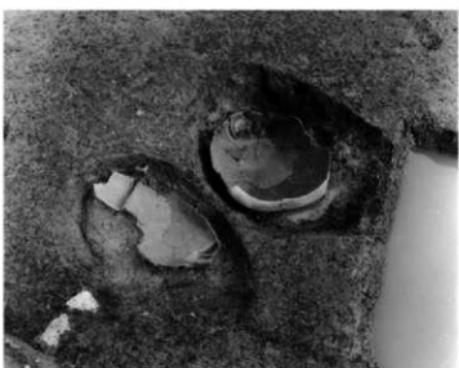


3. 木棺墓SK101 (東より)

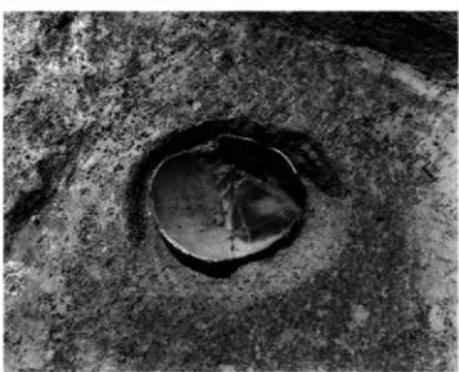
1. ST24・25 (南より)



2. ST26・27 (南より)



3. ST29 (東より)



PL. 12



1. ST32 (東より)



2. ST34 (南より)



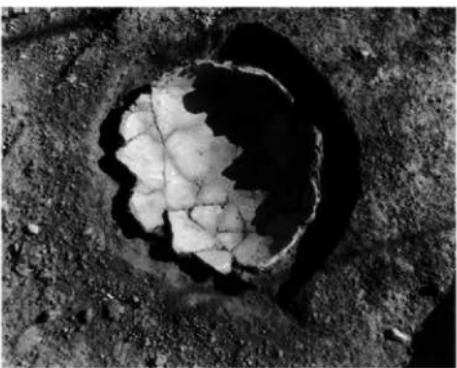
3. ST35 (東より)



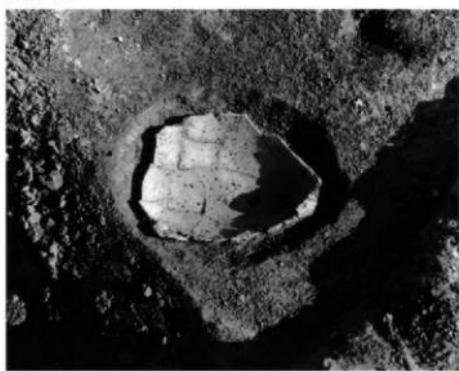
1. ST48 (東より)



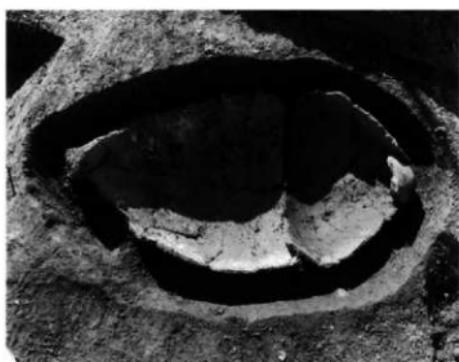
2. ST100 (北より)



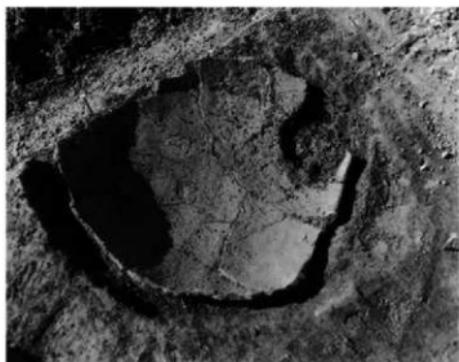
3. ST148 (南より)



1. ST149 (南より)



2. ST150 (北より)



3. ST151 (北より)



PL. 16



ST27



ST32上壺



ST148



ST48上壺



ST150上壺



ST48下壺



ST150下壺

報告書抄録

ふりがな	かまたへきばるいせき				
書名	蒲田部木原遺跡				
副書名	蒲田部木原遺跡第11次調査報告				
卷次	9				
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書				
シリーズ番号	977				
編著者名	阿部 泰之				
編集機関	福岡市教育委員会				
所在地	福岡市中央区天神1-8-1				
発行年月日	2008年3月31日				
調査面積	417.4m ²				
調査原因	大規模流通施設建設				
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯 (世界測地系)	東経 (世界測地系)	調査期間
かまたへきばるいせき 蒲田部木原遺跡 第11次	ふくおかし 福岡県福岡市 ひがし 東区蒲田 2-1111-1他	市町村 40131	遺跡番号 0003	33° 34' 48"	130° 25' 46"
2006.8.16~9.26					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
かまたへきばるいせき 蒲田部木原遺跡 第11次	集落	弥生前期+中期前半 +古墳後期	溝10以上+土壙10+甕棺 墓15+木棺墓1	繩文土器+弥生 土器+須恵器	弥生中期前半の 甕棺墓群
要約	今回の調査では、15基の甕棺墓を始め多くの遺構を検出した。時期は概ね弥生時代前末から中期前半が多い。大形の土壙なども見られるが住居址が検出されず、集落の縁辺部を検出したものと推測される。				

蒲田部木原遺跡9
—蒲田部木原遺跡第11次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第977集

平成20年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
印刷 協文社印刷株式会社